

静岡への メッセー ジ

Message to
SHIZUOKA

漫画家

しりあがり寿氏

Kotobuki Shiriagari



経歴

1958年、静岡市生まれ。1981年、多摩美術大学グラフィックデザイン専攻卒業後、キリンビール株式会社に入社し、パッケージデザイン、広告宣伝等を担当。1985年、単行本『エレキな春』で漫画家としてデビュー。パロディを中心とした新しいタイプのギャグマンガ家として注目を浴びる。1994年、独立後は、幻想的あるいは文学的な作品など次々に発表。マンガ家として独自の活動を続ける一方、近年ではエッセイ、映像、ゲーム、アートなど多方面に創作の幅を広げている。

「NO」と言える静岡人をめざして

ボクは静岡市の駅前、紺屋町の商店街で生まれました。おぐし神社で池の奥を探索したり、駿府公園ではあのへんなカタチの白いスベリ台（まだありますよね！）で遊んだり、やすらぎの塔の台座によじ登ったり、谷津山では防空壕に潜り込んで叱られたり、静岡での子供時代を満喫しました。いやーホントに楽しかった。

高校を卒業して東京に出たのですが、その時初めて静岡を外から見て、静岡が他と違うところがいろいろ分りました。「クジラ」のイントネーションが違うこと。静岡以外では冬は小学生が長ズボンをはいてるということ。静岡ではどこにでもあったあの濃いおでんがどこにもないこと。

そして何よりビックリしたのは東京では

ちゃんと「NO」を言わなければならない、ということでした。そう、静岡ではヒトに対し、ほとんど「NO」ということがなかったのです。それほど静岡ではお互いに相手の気持ちを思いやり、ヒトのいやがることはしない。だからあえて「NO」と言わなければならない場面はほとんどなかった。

よく静岡の人は人が良いとか言われますが、静岡がおれおれ詐欺の被害者全国」というのも納得ですよね。「オレだよ、息子だよ」と言われたら、静岡の人は怪しんでも「アンタがそう言うんなら、そうらなあー」「お金がいるんならしょんねえなー」とお金を振り込んでしまふのでしょうか。

おそらく静岡の人は余裕があるんでしょうね。自分が生きていくためにはヒトとぶつから



今月の一文字

しりあがり寿さんが選ぶ
静岡の良さを表現する一文字。

いつでも暖かな日差しが降り注いでいるイメージがあります。強すぎず人の心まであたためるような日差しです。

陽

作品のご紹介



静岡市葵区PRキャラクター
「あおいくん」

あおいくんとその家族は、第1期「葵区区民懇話会」の提案により、葵区出身の漫画家しりあがり寿さんにデザインを依頼して誕生した、区のPRキャラクターです。「あおいくん」の名前は区民からの応募700件の中から選ばれました。

なければならぬ、そんな場面が少ないような気がします。

静岡は温暖で豊かな自然に加え、東海道の要所にあつてどの時代も何らかの政治的拠点があり、仕事も文化も苦労しないで手に入る。ある意味ホントに地理的に恵まれている土地だと言えるでしょう。でも、近年そんな静岡の地理的な優位性も交通手段の発達、情報通信技術の進歩などによってじよじよに失われつつあるのかもしれない。

今までの静岡は「そこにある」だけで価値があつた。でもこれからの静岡は「そこで何をしているか」が重要になります。では何をすればいいのでしょうか？…これはもう乱暴ですが「自分が好きなことをやる」しかないような気がします。

何年か前、フランスに自分の漫画を売り込みに行った時、日本的だからと墨絵で描いた漫画を持つていったのですが、向こうが欲しいのはそうじゃなくていわゆるオタクというのは

アキバ系とかそういうマンガでした。つまり、相手に合せて作られた中途半端な何かよりもホントに自分たちが好きでつきつめたものの方が世界では残っていくのだな、とその時思いました。相手が欲しいものよりホントに自分が欲しいものでないと成熟した消費社会では生き残れないのかもしれない。

静岡というのは豊かな土地で、たいていのモノは手に入る、そんな恵まれた人たちが心から欲しいもの、そんなモノやサービスならそれは世界に通用するのかもしれないよ。

そのためには静岡の人は今までよりちょっとだけ我を張ることが大切になるかもしれない。ヒトに嫌われても空気を読まなくても自分の好きなものをつきつめる。周りもそんな人間をあたたく盛りたててやる。そうすれば何か新しいものが生まれるかもしれない。

諍いを恐れて自分をまげるのでなく、今こそ静岡人は苦手な「NO」を言うべき時かもしれません。

